バルザックにおけるエリート

東 辰之介

序

バルザックは、身分制度から解放された近代社会の秩序は、各個人にその知能水準に見合った社会的地位を与えることによって成立すると考えた。事実、大革命後に作られたグランド・ゼコールは、そうした新しい社会を象徴し、現在に至るまでフランス社会の特質を決定づけている。一口に言えば、知的能力の高いとみなされる者たちがエリートとして養成され、社会発展の牽引役を任されるような仕組みがこのころ整いつつあったのだ[1]。

こうした知能水準に応じた社会の再編成という考えは、『ルイ・ランベール』において説明される三種類の人類（主人公ルイが用いる特殊人、抽象人、本能人などと訳すほかない奇妙な用語[2]）や、『金色の眼の娘』に描かれるパリ社会の階層構造（上層にいる人間ほど観念操作の量が多い職業に従事する世界[3]）等によって、バルザックの作品において繰り返し表現されている。

以上のことを念頭において『人間喜劇』を読み直すとき、登場人物たちがいかなる知能レベルに設定されているのかということが、ひとつの興味ある問題として浮上してくる。

そこで前稿[4]において筆者は、無一文から王室御用香水商にまで成り上がったセザール・ビロトーの「知能」がその出世および破産といかなる関係にあるのか検討した。その結果、「人の誕生を支配する神秘[5]」によって主人公が中流階級に運命づけられているとする語り手の言葉が作品全体を律している

---

[1] バルザックがこの問題について語る際によく使うのが、« intelligence » という語である。この語に関して本稿では、「頭の働き」という意味合いが強いときには「知能」、そして、「頭の良さ」という意味に重点があるときは「知性」という訳語を用いた。

[2] *Louis Lambert*, dans *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol.（以後 *CH* と表記）; t. XI, p. 688. から原文のまま以下に引用する（イタリック体の使用も原文どおり）。« *De là trois degrés pour l'homme :* Instinctif, *il est au-dessous de la mesure ;* Abstractif, *il est au niveau ;* Spécialiste, *il est au-dessus.* »

[3] *La Fille aux yeux d'or*, *CH*, t. V, p. 1041 et suiv.

[4] 拙稿「近代社会における「知能」—バルザックの場合」、『仏語仏文学研究』第 27 号、東京大学仏語仏文学研究会、2003 年、p. 87-106。

[5] *César Birotteau*, *CH*, t. VI, p. 80.

こと、そして「知能」と社会的地位の間にあるべき正比例の原則こそが主人公を破産させ、彼を中流階級に留めているということが判明した。

では『人間喜劇』において「知能」が高いと認められた者たち、すなわちエリートたちにはいかなる運命が待ち受けているのだろうか。彼らにはその「知能」にふさわしい社会的地位が用意されているのであろうか。

この問いに答えるにあたって知っておくべきことは、バルザックによるエリートについての議論が、決して机上の空論ではなく、どちらかといえば現実的なものであった点である。おそらく、バルザックがこの問題についての基本的見解を形成したのが、七月革命後に多くの論考の執筆を通じて自分の政治的立場を確立してゆく過程においてであったからであろう。結果としてバルザックは、『セザール・ビロトー』に見出されるような若干安易ともいえる「知能」による社会的地位決定論を、エリートについての考察においては退けることになる。『人間喜劇』におけるエリートたちには、その「知能」にふさわしい社会的地位が与えられることはないのである。

バルザックは、自らの希望的観測とはうらはらに、現実社会にはエリートを適切に選び出し、養成し、活用する能力や意志が不足していることを理解する。しかし、そうした幻滅を味わったからこそ、バルザックは現在にまで続くエリートシステムに内在する根本的な問題を、きわめて早い段階で指摘することにもなるのだ。

このような見通しの下で本稿では、バルザックが理想とする社会のあり方がいかなるものであったのかを検討し、その理想から隔たった現状に対する批判の要点を見極めたうえで、理想と現実の乖離がどのようなかたちでバルザックの小説作品に反映されているのか解明することを目標としたい。

「知性」の支配する社会

1829年12月に『結婚の生理学』を成功させて文名を上げたバルザックは、翌年には短編集『私生活情景』も出版し、新聞・雑誌から次々に原稿依頼を受けるようになっていた。そんな1830年の夏、忙しいパリ生活を離れてロワール河畔でバカンスを過ごしているときに、七月革命が起こる。バルザックはしばらく静観を続けるのだが、パリの状況についての連載記事を書くようエミール・ジラルダンに依頼されて首都に戻る。これが1830年9月26日から十九編、半年にわたって『ヴォルール（*Le Voleur*）』紙に掲載された「パリについての手紙」である。

「パリについての手紙」は基本的に日々の政治状況についての報告であり、ベルギーの独立宣言、リベラル左派の＜運動派＞ラフィットによる組閣、保守の＜抵抗派＞カジミール・ペリエによる組閣などがその考察の中心となるのであるが、そうした時評のところどころには、バルザックが求める新しい社会の姿が描かれている。たとえまだ現実がさほどの変化を見せていないにしても、今度の革命によって 1815 年以来の反動的な復古王政が終わったことはどうやら確かなのであり、誰もが未来の社会像についての夢を再び語ってしかるべきときであった。

その青写真の中心にあったのが、国家による有能な人材の積極的登用という考えである。そしてそれはまず、代議士をいかに選び出すかという問題に帰結する。すでに 1819 年にバルザックは、「わが国の革命はまだ終わっていないし、事態の落ち着かない様子からして、これから波乱がいくつもあると思う。代議制は偉大な才能（grands talents）を必要とするし、選挙民たちだってだまされたままではいないさ[6]」と述べていた。「パリについての手紙」において語られるのも、有能な人材に対するこれと同じような期待である。

> フランスの願いは法の前の平等を実現する立憲君主制である。それは、最初のそして最も単純な集合体たる「市町村」から、最も強大な集合体たる「県」にいたるまでを常時代表する代表団と受任者たちの好ましい階層制を作り出す。そしてこれらの新しい機構の働きによって、知的能力と財力の持ち主たち（capacités intellectuelles et financières）が、その才能に応じて絶えず国家の最高位へと押し上げられるのだ[7]。

おそらく「知的能力と財力」という表現によって直接的に喚起されるのは、啓蒙の継承者として意識されたブルジョワジー、あるいは大銀行家を頂点とする上層ブルジョワジーであろうが、バルザックはそうした特定を避けることによって、貴族と平民の対立を前提とするような考えから距離をとっている。重要なのは、どんな出自であれ有能な人間であれば、国家はそうした人々をその上層部に招き入れるべきであるとバルザックが固く信じていることだ。

こうした確信とともに「パリについての手紙」の連載を終えたバルザックは、その直後の 1831 年 4 月 19 日に選挙法が改正されたことに勇気づけられ、

---

[6] *Correspondance*, textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Garnier, 1960-1969, 5 vol. ; t. I, p. 41, À Laure Balzac, septembre 1819.

[7] *Lettres sur Paris*, dans *Œuvres diverses* de Balzac, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade »（以後 *OD* と表記）, 2 vol. parus ; t. I (1990), t. II (1996) ; t. II, p. 959.

自分にも被選挙権が認められるだろうという見通しの下に、7 月 5 日に実施が予定されていた選挙への出馬を思い立つ。高い「知的能力」ゆえに国政に関わるべき人材とは、第一に彼自身のことだったのであろう。バルザックは選挙人の支持を得るために政治パンフレット『二大臣の政策についての調査』を書くのであるが、そこでは七月革命を起こしたフランスについて次のような説明がなされている。

> フランスは自分に共鳴するような立法府を持つことが必要だと感じていた。それはフランスの観念、欲求、発展の正確な表現でなければならない。それはまた思考、産業、商業、国土といったフランスのあらゆる力を体現しなければならない。というのも、今日思考と産業とは国土と同じほどの恵みをもたらすからだ。大地と産業は予算も生み出してくれる。いまや知性（intelligence）は、人間による二つの偉大な開発事業、すなわち商業と農業との比類なき原動力となっているのだ。
>
> フランスは自分と同じように知的な権力（puissance intelligente）に服従することを欲していたのである[8]。

ここに述べられているのは、国家とは第一に経済的な主体であって立法府はその経済発展のために努力しなければならないという極めて近代的な考えである。まずバルザックは「思考、産業、商業、国土」という四つの力を挙げる。「思考」という力が具体的に何を指すのか定かではないが、次の文で「思考と産業」が新しい力、「国土」が古くからある力とされていることからすると、新しい産業を興すのに必要な創造力のことであろうと予想される。次の文では「大地と産業」すなわち農業と工業という新旧の力が並置され、最後にすべての原動力たる「知性」の存在が指摘される。ここで気にかかるのは「農業」と対になっているのが「産業」ではなく「商業」であることだが、バルザックはこうした横滑りについてはあまり気にしていないようだ。とにかく経済活動はすべて「知性」という原動力によってこそ発展するというのが、この一節の趣旨であると考えていいだろう。

バルザックはさらに外交や軍事、財政、内政についての文章を書いて 7 月の選挙を戦うつもりだったようだが、被選挙権を得るのに必要な納税額を払っていなかったので立候補することさえ認められず、幻滅して政治への興味をしばらく失うことになる。しかし、およそ一年後の 1832 年 3 月、正統王朝派の機関紙『レノヴァトゥール（*Le Rénovateur*）』に寄稿を始めたバルザック

---

[8] *Enquête sur la politique des deux ministères*, *OD*, t. II, p. 989.

は、たとえ被選挙権がなくとも若くて流行の作家を自陣に加えることに象徴的な意味を見出した正統王朝派の人々によって歓迎され、6月13日にシノンで行われる予定であった補選の公認候補者に選ばれる。こうした珍事の背景には、当時、正統王朝派の人々の多くが現政体を容認したとみなされることを嫌って投票行動を忌避していたために、誰が立候補しても当選の見込みがなかったという事情があった。

このバルザックの正統王朝主義への転向については、従来からさまざまなことが言われてきたが、ここで確認しておきたいのは、それまで自由主義的な調子ではあれ結局のところどの党派にも与せずに外野の評論家的な立場から七月王政の＜中庸＞政策を批判し、「知性」の有効活用を漠然と主張するにすぎなかったバルザックが、たとえ現在のわれわれから見れば非現実的に見えようとも、当時の状況からすれば野党勢力として現実的な力を持ちえた正統王朝主義を選び取ることによって、自分の理念をより現実的な装いの下に提示するようになったことである。代議制が存在するというただそれだけのことで「知的な権力」が生まれる保証はないし、立法府だけが国家のすべてではない。実際にあるべき国家像を提示しようと思うなら、もう少し現実に即して全体の見取り図を描く必要があったといえよう。こうして1832年の夏に書かれたのが「近代的統治について」である。

この中でバルザックは、選挙によって選ばれた代議士が大臣となって組織する政府は、不安定であるがゆえに無力かつ無責任になりやすく、特定集団の利益のみを追求しがちであるから好ましくないと述べ、望まれるのは「あらゆる人間社会に見出される[9]」社会の三層構造から自然に導き出される政体、すなわち、①政治に参加する余裕などない「貧しく無知な階級」には仕事とパンを与え、②「中流階級」には選挙による議会を与えて政府に対する交渉権を付与し、③領地を持つがゆえに愛国心が強く経済的にも安定している広義の「貴族階級」には世襲貴族院議員職を与えて国政の中心を担わせるような政体であるとする。このように要約してしまうと、「知性」による支配というこれまでの理念とは無関係な、単なる復古的な寡頭体制のようだが、細部を検討するとそうでもないことがわかる。

まず、「無知」であるがゆえに政治参加を認められないとされる下層階級であるが、その中にも「不幸の領域から脱出するための天分（génie）[10]」の持ち主がいくらか存在するであろうことが指摘されている。このことは、下層

[9] *Du gouvernement moderne*, *OD*, t. II, p. 1073.
[10] *Ibid.*, p. 1075.

階級出身であっても能力があれば、上位の階層に吸収されてしかるべきだというバルザックの考えを示唆している。

また、貴族階級については「金銭、権力あるいは知性によって創造されるあらゆる有力層を含む必要がある[11]」とされ、単なる既得権の確認ではないことが言われている。

最も重要なのは、中流階級についての議論であるが、ここではまず「知性のしるしとしての財産価値（la valeur de la propriété, prise comme signe d'intelligence）[12]」という仮説、すなわち中流階級における「知性」は、彼らの財産によって表されているはずだという仮説が提出される。その上でバルザックは、有権者を納税額別にグループ分けし、納税額が高いグループほど大勢の代議士を議会に送れるような選挙制度を提案する。たとえば、納税額が 1000 フランの選挙人団は、納税額 100 フランの選挙人団よりも二倍の代議士を選出できるようにすると言うのである。この仕組みは、それぞれの選挙人団が自らのグループの内部から代議士を選出すると予想されることから、財産が多ければ多いほど、すなわち「知性」があればあるほど代議士になりやすい仕組みであると考えられる。

ただ言うまでもなく、財産だけを「知性」の物差しとするやり方にはおのずから限界がある。中流階級のうち最も人数の多い最下層グループに眠っているはずの「知性」はどうしたらうまく活用できるのか。こうはっきりと問いが立てられるわけではないのだが、この問題に対するバルザックの回答は次の一節から推察されるように思われる。

> 政府は最も下位の選挙人グループから役人を雇うべきである。なぜなら、上位のグループは莫大な財産によって生じる安定感によって間違いなく彼ら自身に属しているけれども、最も貧しい選挙人たちなら役人職への参加を認められることによって、政府の仕組みと思考と困難とをよく理解してその友となり、それを転覆しようとは思わないだろうから[13]。

ここには、中流階級に属してはいるが財産の少ない人々をいかにして政府の味方にするかという問題に対し、彼らを公務員として雇用すればよいという解決策が提示されている。そしてそれと同時に、バルザックが考える近代的政体において、行政府が「知性」とどのような関係をとり結ぶべきなのか

---

[11] *Ibid.*, p. 1074.
[12] *Ibid.*, p. 1077.
[13] *Ibid.*, p. 1078.

も示唆されているように思われる。すなわち、すでに物的財産を生み出した「知性」の吸収されていく先が立法府であるのに対して、行政府の方には、財産という裏づけのないいわば潜在的な「知性」が集まることが期待されているのである。「知性」というフランスの発展に必要な力を中流階級からいかに国家は吸い上げるべきかという問題に対して、バルザックは立法府と行政府がその受け皿になるべきとしたのではなかろうか。

こうしてバルザックは「近代的統治について」において、それまでの漠然とした夢、すなわち「知性」によってますます発展する新しいフランスというイメージを、現に存在する社会の階層構造をふまえたものに修正した。それは、力を失いつつある貴族階級に望みをかけている点において歴史の流れに逆らったものであったが、数世紀にわたって力を蓄えてきたブルジョワジーの「知性」をうまく権力に吸収することによって、安定と発展とを同時に実現しようという点においてはそれなりの説得力をもつ将来図であった。

エリートシステムへの疑念

しかしながら、どれだけバルザックが自分の考える統治システムを現実的な装いの下に提示しようとも、それは現実そのものではない。特に現実の下院議会は、「近代的統治について」が想定するような開明的な中流階級の集まりであるとは到底感じられなかった[14]。そうした中で、近い将来に立法府が「知性」の集う場になると信じるためには、よほどの楽天家でなければならなかったであろう。

これに対して、「知性」の高さのみを基準として選別された有能な人材を、行政府が積極的に取り込んで権力に同化するというシステムはどうだろうか。こちらはなんと、バルザックの夢をかなえてくれそうな仕組みが大革命直後から存在していた。競争試験によってフランス各地から集められた若者に国費でエリート教育を施して行政府に送り込むシステム、すなわち理工科学校（L'École Polytechnique）などのグランド・ゼコールを中心とするエリートシステムである。理工科学校は、1794 年に創立された中央公共事業学校（L'École centrale des travaux publics）が 1795 年に改組されてできた学校で、旧称が示

[14] 『あら皮』（1831）に議会政治に対する次のような批判がある。「憲政がもたらした直接の結果は、知性の凡庸化（l'aplatissement des intelligences）ということだ。[…] 議席を有する三百人のブルジョアたちは、ポプラを植えることくらいしか思いつかないだろう。専制政治は法に反しながらも偉業を達成するが、自由は法に則ってできるわずかなことさえもやるつもりがないのだ。」*La Peau de chagrin*, *CH*, t. X, p. 102-103.

唆する通り卒業生の多くを土木局などの行政機関に送り出していた。

バルザックは1830年以前の段階において、どちらかといえば好意的な形でこの学校に言及している。たとえば、『ヴァン＝クロール』（1825）の主人公オラースは、王政復古によってたまたま手に入った地位に安住せずに、自らの力によって未来を切り開こうとする新しい貴族の一人であるが、理工科学校の卒業生でもある[15]。また『ふくろう党』（1829）における王党派の若き将軍モントーラン侯爵が、正体を隠す際に理工科学校の学生という肩書きを使っているわけは、それが大革命の生んだ新しいエリートの象徴であると知っているからであろう[16]。

以上のことからして、「近代的統治について」を書き終えたバルザックが、この学校に対してさらなる期待を寄せるのはごく自然なことと思われる。それは、新たな産業を生み出すような人材や、道路や橋や運河の専門家を育て、商業や農業の活性化に努めることによってフランスを発展へと導いてくれるはずなのだから。こうして、バルザックにおける「知的な権力」への夢は、ある時点において、理工科学校に対する過度な期待という形をとる[17]。

ただし、あまりに大きすぎる期待に現実が応えられるはずもなく、バルザックは理工科学校を中心とするエリートシステムの実態を知るにしたがって、徐々に疑念の色を濃くしていく。とりわけ、妹ロールと1820年に結婚した理工科学校の卒業生、義弟ウジェーヌ・シュルヴィル（Eugène Surville）のケースは、バルザックの理工科学校に対する評価をきわめて悪いものにした。詳細は割愛するが、土木局の技師であったシュルヴィルが、セーヌ川とロワール川を短時間でつなぐはずのエソンヌ（Essonne）運河の建設計画のために奔走したにもかかわらず、行政当局から工事の許可が下りなかったのである[18]。こうした事件は、運河の経済効果を正しく見積もることなどできないバルザックの目には、エリートたちの「知性」がフランスの発展のためにきちんと活用されていない証拠と映ったに違いない。1834年3月に冒頭の一節が発表

---

[15] *Wann-Chlore*, dans *Premiers Romans* de Balzac, édition établie par André Lorant, Robert Laffont, « Bouquins », 1999, 2 vol. ; t. II, p. 808.

[16] *Les Chouans*, *CH*, t. VIII, p. 975.

[17]「あの学校を立派に卒業した者は、どこでも歓迎されます。これまでに、行政官、外交官、学者、技師、将軍、航海士、司法官、工場主、銀行家が、あの学校から出ています。ですから、金持ちの青年、あるいは良家の青年が、あそこへ入学する目的で勉強しているのは、ちっとも不思議なことではないのです。」*La Recherche de l'Absolu*, *CH*, t. X, p. 766-767.

[18] 詳細については、Anne-Marie Meininger, « Eugène Surville, modèle reparaissant de *La Comédie humaine* », *L'Année balzacienne* 1963, p. 195-250. を参照のこと。

された『うまい考えがたどる行政上の冒険[19]』という未完の作品において、バルザックはエソンヌ運河という観念をレソンヌ（Lessones）伯爵なる人物によって実体化しつつ、その実現がさまざまな計略によって妨害されるさまを描き出そうとしている。

そして『神と和解したメルモス』(1835) において、ついにバルザックは行政およびグランド・ゼコールの制度一般に対する痛罵を書き連ねることとなる。扱う現金を横領しないだけが取り柄だとされる現金出納係についての風刺から、やや脱線して書かれた次の一節がそれである。

> 政府は、十八歳から二十歳の間の若い知性（jeunes intelligences）から、早熟な人材を徴兵する。そしてさらなる厳選のために、召集した偉大な頭脳たち（grands cerveaux）を時期尚早の勉強によって疲弊させるのだが、それは庭師が種を選り分けるのに似ている。政府はこの仕事のために才能計量係を訓練しておいて、造幣局で金の純度を調べるような具合に脳みそ（cervelles）を調べさせる。それから、最も進んだ国民が毎年政府に差し出す希望に燃えた五百の頭（têtes）のうちの三分の一を受け取って、「学校（*ses Écoles*）」と呼ばれる大きな袋に放り込み、そこで三年間こね回す。これらの若木はそれぞれが莫大な富を生むはずであるのに、政府は彼らを現金出納係のような存在にしてしまう。彼らを専任技師に任命するか、砲兵科長として使うのだ。要するに下位階級のうちで最も上級なもののすべてを彼らに保証してやるのである。それから、数学で肥育され科学を詰め込まれたこれらのエリートたちが五十歳に達すると、政府は彼らが果たした職務に対する報酬として、四階にある住まいと子供を連れた妻、そして凡庸さによるあらゆる幸せを世話してやる。このだまされた人民の中から五、六人の天才が脱け出て社会の頂上によじ登るなどということ、それこそ奇跡ではなかろうか[20]。

競争試験によって「若い知性」を疲弊させるだけでは満足せず、つまらない仕事しか与えないことで彼らを凡庸な人間に変えてしまう政府は、フランス発展の原動力たる「知性」をあたら無駄にしているのだ、というわけである。こうした批判にどれだけバルザックの真意を読み取るべきかは、『神と和解したメルモス』のストーリーからは判断できないため、これまでの推移から推察するほかないが、おそらく 1834 年から 1835 年くらいの時期にグランド・ゼコールに対する期待が裏切られたという気持ちが高まり、それが一気に糾弾のレベルにまで達してしまったのであろうと思われる。

確かにこれまでにも、批判の前兆はあった。たとえば『田舎医者』(1833)

---

[19] *Aventures administratives d'une idée heureuse*, *CH*, t. XII, p. 767-790.
[20] *Melmoth réconcilié*, *CH*, t. X, p. 346-347.

に登場する少年は、「理工科学校に入学するために、あまりに熱心に数学を勉強[21]」したために病気になったとされている。また、時期を考えると、シュルヴィルを介して 1829 年以来友人であった理工科学校卒のフランソワ＝ミシェル・カロー（François-Michel Carraud）が、ごく平凡な行政官としての勤めを終えて 1834 年 10 月に隠居したことと関係があるのかもしれない。いずれにせよ、『神と和解したメルモス』において決定的な形を取ったバルザックによる行政批判は、以後の作品においても繰り返されることになる。

その意味で次に注目されるのは、1837 年 7 月に『プレス（*La Presse*）』紙上で連載された『非凡な女（*La Femme supérieure*）』（改題後は『平役人（*Les Employés*）』）である。これは、財務省の課長で「よく組織された頭脳（une cervelle bien organisée）[22]」を持つラブールダンが、「非凡な女」たるラブールダン夫人の計略によって密かに支えられつつも、「無能の三位一体（*la Trinité sans Esprit*）[23]」と揶揄される三人組のひとりである別の課長と、「卑小さの力（la puissance de la petitesse）[24]」を秘めたその妻によって、一度は確実と思われた局長の座を奪われてしまう物語である。ラブールダンはグランド・ゼコール出身ではないのだが、ここでも行政機関が「知性」の持ち主を正しく扱っていないという咎で批判されていることに変わりはない[25]。

とはいえ、『神と和解したメルモス』におけるグランド・ゼコール批判を直接に引き継ぐのは、『村の司祭』（1841）におけるジェラールの手紙をおいてほかにない。これは、1839 年に『プレス』紙上で連載されたものに大幅に加筆して単行本に仕上げる際に生まれた部分で、バルザックは執筆にあたって「理工科学校を徹底的にやっつける[26]」のだと妹ロールに書き送っている。おそらく、義弟シュルヴィルが関わった二つの運河計画の中止が決定的となり[27]、「妹の人生もまた闇へと消えていきます[28]」というかつての自分自身の

---

[21] *Le Médecin de campagne*, *CH*, t. IX, p. 583.
[22] *Les Employés*, *CH*, t. VII, p. 904.
[23] *Ibid.*, p. 965.
[24] *Ibid.*, p. 954.
[25] 『うまい考えがたどる行政上の冒険』が問題にした運河計画の遅滞は、行政機関の凡庸さがその原因であるとここで結論されている。「こうして凡庸さがフランス行政機関の中にゆっくりと地歩を占めていった。すべて頭の固い連中によって構成されている官僚制度は国の繁栄を妨げ、一地方の生産を刺激したに違いない運河の計画を書類箱の中で七年も遅らせ、あらゆることに怯え、緩慢さを永続させ、自分たちを永続させ不滅にするような悪弊をいつまでも続けるのだった。」*Ibid.*, p. 909.
[26] *Correspondance*, t. IV, p. 218, À Laure Surville, fin novembre 1840.
[27] エソンヌ運河計画は 1839 年、実現のためにシュルヴィルが公務員の職を辞したロワール下流運河計画は 1840 年に中止が決定された。
[28] *Lettres à madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2

言葉がますます現実味を帯びつつあった中で、こうした決意がなされたのであろう。

手紙の筆者ジェラールについては、二つの点に留意する必要がある。一つは、彼が理工科学校と土木学校を卒業し役所に入って専任技師となるも、与えられた仕事の不毛さに耐えられなくなって、代父グロステットに転職の相談をしているという点である。もう一つは、ジェラールはたまたまエリートコースに乗っただけの凡人などではまったくないということである。それは彼が「心の強さと知的熱意（la puissance de cœur et l'ardeur d'intelligence）[29]」の持ち主であるとされることから推察されるが、加えて「両肩の間にめり込んだ首（le cou dans les épaules）（809）」という風貌が、脳と心臓の接近、すなわち偉人の存在を知らせるものとしてあることからも明らかである[30]。つまり、ジェラールは正真正銘の知的エリートとして造形されているわけで、こうした登場人物に理工科学校批判をさせるということは、バルザックがこの問題に正面から取り組もうとしている証拠であると考えてよいだろう。

手紙の内容は、基本的に『神と和解したメルモス』で言われたことの敷衍であると言ってよい。たとえば、入学試験準備によって若く優秀な頭脳が無益に疲弊しているという従来からの主張は、促成栽培の弊害という比喩とともに、次のように説明されている。

> 自然の法則は無慈悲なものです。それは、社会の企図にも、その意志にも、いささかも屈しません。精神界においても、自然界においても、あらゆる濫用には報いがあるのです。温室に木を入れて、時期よりも早く果実を求めれば、木そのものか、あるいは果物の質を犠牲にすることになります。ラ・カンティニ（La Quintinie）は、ルイ十四世に一年中、毎朝花束を捧げようとして、オレンジの木を駄目にしていました。知能（intelligences）についても同じことが言えます。成長を終えたばかりの頭脳（cerveaux）に要求される力は、将来の割引（escompte）なのです。（795）

優秀な若者の頭脳は確かに自然から贈り物ではあるが、大事に育てかつ適切なやり方でその恵みを活用しなければならない、早くから酷使してしまっ

---

vol. ; t. I, p. 339, 1er octobre 1836.

[29] *Le Curé de village*, *CH*, t. IX, p. 809. 以下、『村の司祭』を参照する際は、引用後の括弧内に頁数を示す。訳文作成にあたっては、『バルザック全集』第 21 巻、東京創元社、1975 年、加藤尚宏訳を参照させていただいた。

[30] 拙稿を参照。「バルザックの人物描写における解剖学的視線 —「短い首」の意味するもの」、『仏語仏文学研究』第 26 号、東京大学仏語仏文学研究会、2002 年、p. 47-64。

ては将来の成長を阻害するようなものだ、というわけである。

また、卒業して役人になった者たちが、能力に見合った仕事を与えられないために、次第に凡庸さの中に落ち込んでいってしまうという批判も繰り返される。

> あなたは、私が今の任地にいても、知的能力（forces intellectuelles）を使うのに何ら差しつかえあるまい、この平凡な生活の沈黙の中でも、何か人類に役立つ問題の解決を追求するのに何ら支障があるまいと、おっしゃるでしょう。いや、あなたは田舎生活の影響力をご存じないのです。ほとんど無意味な仕事に時間をつぶすにはかなり忙しいのですけれども、われわれの教育が創り出した豊かな能力を働かせるにはかなり暇である、そういう生活の弛緩作用をご存じないのです。（802）

ジェラールによる批判は、常に「知的能力」の間違った使い方に向けられている。高い「知的能力」が活用もされず、無為に衰弱させられるばかりであることが問題であるとされているのである。

そして、こちらは『神と和解したメルモス』と一線を画す点であるが、このエリートシステムに指摘される二つの問題、つまり学校に入る前と出た後の問題に対して、ジェラールは解決方法も提示しようとする。まず競争試験のもたらす弊害の解消法については、次のように述べられている。

> 専門学校を設立したり、生徒の選抜方法を定めたりする前に、教育制度と人間の能力との広範におよぶ全体的関係を頭脳（tête）におさめ、その利害得失を比較考量し、さらに過去の中に未来の法則を研究するという、そうした偉大な思想家が今までにあったでしょうか。［…］人間の知識の時期尚早な攻撃に耐えうる頭脳（cerveaux）の内的構造を、人々は知っていたでしょうか。あるいは、私がこの手紙を書いている現在、知っているでしょうか。この問題が、何よりもまず人間の生理学（physiologie de l'homme）にかかっていることに気づいているでしょうか。（795）

文意はさほど明瞭ではないが、「人間の生理学」という表現に注目していただきたい。少し先にはこうも書かれている。

> フランスにおいて、一つの世代全体の中から国家の知識階層（partie savante）となるべく運命づけられた人たちを選び出す責務を、いったいいかなる聖職者が引き受けているでしょうか。この運命の大僧侶たちは、どんな勉強をしていなくてはならないでしょうか。おそらく彼らには数学的知識以上に、生理学的知識（connaissances physiologiques）が必要であると思います。（805）

ここまで読めばジェラールの言わんとしていることは明らかであろう。知的エリートの選抜は、競争試験によってではなく、むしろ生理学的な観点から見て知的訓練に適していると考えられる人材を発掘することによって行うべきだと述べているのである。これは、現在のわれわれから見ると途方もない提案であるようにも思われるが、人類を「知能」水準によって三種類に分類する『ルイ・ランベール』や、主人公の「知能」が生まれたときから中流階級の程度までしか発達しないと決まっている『セザール・ビロトー』を書いたバルザックにとっては、ごく自然な結論だったのかもしれない。

他方、グランド・ゼコールを卒業した後どう生きるかという問題、すなわち手紙を書いているジェラールにとってより切実な問題に対しては、どのような解決法が語られているのであろうか。それは、役所を去るというごく個人的であっさりした方法である。

> ですから私は、今いる地位にとどまっているよりは、商業あるいは工業関係の事業を指揮して、産業や、社会が抱えている数多くの問題の一つを解決しようと努めながら、ごくわずかなものを得て暮らしていった方がいいと思うのです。[…] 私にとっては、自分が国の役に立っていると確かに思えることだけが、唯一の喜びなのです。私の最大の楽しみは、私の能力に適った環境で活動することでしょう。(802-803)

バルザックはジェラールにこのような解決方法をとらせることによって、一つの決断をしたのだと言っていいだろう。それは、一口に言うなら「知的な権力」の主体を変更することである。「知性」によるフランスの繁栄という目標の実現において、立法府や行政府などの国家機関にあまり期待できないのであれば、個人や民間企業に大きな役割を与えるほかないという判断がここには認められないだろうか。

このような転換をしたバルザックの目的はいったい何だろうか。それは、議会政治や行政機関の問題をいったん棚上げにし、エリートたるジェラールに自由な活躍の場を与えることで、高い「知的能力」がフランスの発展に役立つさまを高らかに描き出すことであったろうと思われる。実際、この手紙を書いた後ジェラールは、『村の司祭』のヒロインであるヴェロニックとともに、彼女の領地であるモンテニャックという架空の村の改良に成功することになる。

しかし問題は、このモンテニャックにおけるジェラールの成功がどれだけの妥当性をもって描かれているかということである。それがもしあまりにも恣意的なものであれば、ジェラールというエリートの社会的活躍は完全な夢物語にすぎないことになってしまう。この問題について考えるためには、『村の司祭』という作品全体の枠組みを確認しなければなるまい。

『村の司祭』のヒロインであるヴェロニックは、愛人が窃盗と殺人の罪を一人で背負って刑死したことに絶望するが、夫の死後、愛人の出身地モンテニャック村に移り住み、当地のボネ司祭が以前から温めていた灌漑計画の実行に取り掛かる。バルザックはこれについて序文中で「カトリック的悔悛の実践（637）」であると述べている。そして、事業には「最も正確な科学的手段（759）」が不可欠であるとボネ司祭に言われたヴェロニックは、亡夫の旧友グロステットに相談してジェラールを紹介してもらう。ジェラールが役所を辞めたがっていたのは上に見た通りである。これによりボネ司祭、ヴェロニック、ジェラールの三人が協力してモンテニャックを繁栄へと導くことになるのだが、ヴェロニックの魂の傷は癒えず、やがて彼女は早すぎる死を迎えてしまう。物語はここで幕切れとなるが、司祭とジェラールが村に残っていることからモンテニャックの将来は決して暗くないことが暗示される。

したがってジェラールは、ヴェロニックという施工主から土木技術の責任者として抜擢されているわけで、この転身によって自分の専門能力をいかんなく発揮できるようになったものとさしあたり考えてよい。その限りにおいて、「われわれは手足に過ぎません。あの方（ヴェロニック）が考える頭なのです（855）」というジェラールの言葉には、謙遜と同時にテクノクラートしての自分の仕事に対する自負を読み取ることができるだろう。

しかしながら、作品全体の枠組みとしては、モンテニャックの開発に慈善事業としての性格が強く付与されていることが何よりも重要である。なぜなら、モンテニャックはヴェロニックの領地であるしそれを改良することは決して単なる貧者への施しではないのであるが、もしもそれが採算を度外視した散財であったとしたらジェラールの活躍も無に等しいものとなってしまうからである。投資と収益のバランスも考えずに、ただ豊富に与えられた資金を使ってダムや運河を作るだけでは、「知性」による国土の開発とはお世辞にも言えないだろう。だから、モンテニャックの成功をヴェロニックにとってと同様ジェラールにとっても価値あるものにするためには、それを慈善的性格と経済的合理性の両方を兼ね備えたものとして提示しなければならない。

それに成功して初めてジェラールというエリートの救済が曲がりなりにも完成することになるのである。

そしてそれはおそらく、『村の司祭』を書くにあたって常にバルザックが念頭においていたことだった。ジェラールの「知的能力」を行政機関においてではなく民間において発揮させることにした以上、重要なのは事業が経営として成立する様子を説得的に描くことである。バルザックはモンテニャックの開発について語るとき、①土地、②資本、③労働力など事業を支える諸条件について細かく説明しているが、それはこの村の成功例が決して途方もない夢物語ではなくて、現実における実現可能性があるということをそうした細部の書き込みによって読者に信じさせたいからなのである。

土地

たとえば、なぜ、灌漑工事の手間さえかければ農場として開発可能な土地がこれまで放って置かれ、しかもヴェロニックの夫である銀行家のグラランがそれを妻のために買ってやることができたのかという土地取得の問題について、『村の司祭』の語り手はいろいろと現実的な説明をつけようと努力している。最初に挙げられるのは政治的な理由である。

> 彼（ナヴァラン公爵）には1789年の革命のことがあまりにも強く記憶にあって、革命が貴族階級全体に与えた教訓を役立てないわけにはいかなかったのである。（743-744）

つまり、大革命の際の財産没収という悪夢に取りつかれているナヴァラン公爵という貴族が、1829年という七月革命直前の不穏な時期にどうしても財産を現金化したいと考えたがゆえに、ヴェロニックはモンテニャックを手に入れられたというわけだ。このことは、ヴェロニックがおそらくは平時よりも有利な条件でこの土地を購入できたことを暗に示唆しており、仮にモンテニャックの改造事業が純粋な収益獲得のために行われたとしても、初期投資を抑えた分だけその成功率が高まるような具合に設定されているというべきであろう。

さらに、モンテニャックの有利な購入の説明となる理由には次のようなものがある。コロラというのは、ナヴァラン公爵が土地調査のために派遣したモンテニャックの管理人である。

> ジェローム・コロラがここに見たものは、ただ、未開で不毛の土地と、輸送が困難なために利用できない森林の木材と、廃墟と化した城館と、そして、住

居と庭園を元通りにするためにかかる巨額の費用だった。この実直ではあるが、愚かな（inintelligent）召使いは、遠くから見ればこの広大な森に陰影を与えている、花崗岩がばらまかれたいくつもの空地にとりわけ怖気づいてしまったので、この領地が売られることになったのも、つまりは彼のせいだった。（761）

ここで言われているのは、たとえ政治的なリスクがあろうと、もしもナヴァラン公爵の管理人が「愚か（inintelligent）」でなかったら、公爵はモンテニャックの価値についてより正確な情報を得ることができ、結果として領地の売却を思いとどまったかもしれない、ということである。この記述と対照をなすのは、「一時間もの間司祭を事務室に引き止め、いろいろ情報を聞き出した（744）」というヴェロニックの夫グラランの行動であろう。司祭というのはもちろんボネ司祭のことで、モンテニャックの開発可能性について熱心に説明したものと考えられる。したがって両者を比較するならば、売り手のナヴァラン公爵はモンテニャックについて表面的で不十分な情報しか持っていなかったのに対し、買い手のグラランは熱意ある司祭を通じて前向きで詳しい情報を持っていたことになる。このような情報の偏在がわざわざ強調されている理由は一つしかない。バルザックは、現実にもありそうな状況をうまく小説中に導入することによって、ヴェロニックがなるべく有利な買い物をできるように心を砕いているのである。

このように、モンテニャックは単にヴェロニックの死んだ愛人の出身地であるばかりでなく、開発事業者が購入を考えるに当たっても非常に買い得であるような土地として提示されているとことがわかる。こうした設定は、最終的にジェラールの成功の価値を高めることにつながってゆくだろう。

しかしながら、モンテニャックの土地の質についての記述に関しては、いくらでも幸運を作り出せるフィクションの特質を濫用しているように思われる。語り手はモンテニャックに初めて言及するとき、この村とその周辺地域について次のような断言をしている。

植物が生えることを忘れた、不毛な鉱物の残骸と、角が取れて丸くなった小石と、死んだ土壌とで覆われたこうした空間は、文明に突きつけられた挑戦である。（706）

これを読む限り、モンテニャックの開発は相当の困難を伴うことが予想されよう。ところがしばらく読み進めると、モンテニャックの森番ファラベッシュによって、若干異なる説明がなされている。

> その広大な荒れ地は、おそらく三千アルパンはありますが、三つの村の共有地になっております。けれども、モンテニャックの平原と同じで、何の役にも立ちません。まだ、奥様の御領地の方は、砂利の間に砂やいくらかの土がありますが、あちらは全くの凝灰岩です。(777-778)

土地の不毛さにも程度があって、モンテニャックの平原の場合はまだ望みがある方だと言うのである。もちろん、ファラベッシュはボネ司祭の言いつけにしたがって綿密な調査をしているという設定なので、こうした詳細情報が後から追加されること自体は、それほど不自然ではないかもしれない。ただ奇妙なのは、次に語り手がモンテニャックの平原に言及するときに、その質がさらによくなってしまうことである。

> 少なくとも、モンテニャックの平原には、小石や、砂や、若干の柔らかい土地、あるいは、粘土質の土地や、残骸や、耕作のできそうな何プースかの地表があった。(781-782)

ファラベッシュの説明によれば、砂利の間に砂や土がいくらかある程度だったのに、ここではいつの間にか「耕作のできそうな何プースかの地表」が追加されている。こうなると、モンテニャックを不毛の地だとした最初の説明はいったい何だったのかと疑問に思えてくる。しかし、バルザックはこうした疑問には答えずに、つぎのような幸運な偶然を作り出してすべてをまるく収めてしまう。

> 平原の農場では、牛や馬を飼育していた。実は土地を整備してみて、一帯に七プースの深さの腐植土があることを発見し、年ごとの落ち葉と、家畜の放牧によって生ずる肥料と、またとくにガブーの貯水池に注ぐ雪解け水とが、その土を絶えず肥沃にしていくに違いないことが分かったからだった。(834)

バルザックがモンテニャックの平原の地質を徐々に良くしてしまう理由は、すでに述べた通りである。モンテニャックの改良という事業が、慈善の実践でありながらも企業経営としてもきちんと成立できるような具合に、バルザックはすべてを組み立てたかったのだ。しかしながら、行きすぎがあると逆に本当らしさを失うことにもなりかねない。上に見た平原の地質についての評価の変転は、そうした行きすぎの一つであり、モンテニャックという村の本当らしさを減じる一因となってしまっているように思われる。

資本

本当らしさの追求は、資金運用の側面においても行われている。開発には、①土地取得の費用に加えて、②工事費用が必要だし、③収益が伸びなければジェラールの成功は疑わしいものになってしまうだろう。最終的にはすべて小説家のさじ加減ひとつなのであるが、バルザックはこれらすべてにある程度現実的な説明を与えようと努めている。

まず土地取得の費用であるが、これはヴェロニックの持参金、すなわち彼女の両親であるソーヴィア夫妻が生涯をかけて稼ぎ出した財産がその出所となっている。行商人だったソーヴィアがいかにして巨額の富を蓄えることに成功したのかは、作品冒頭の数ページにおいて語られており（公売城館の解体販売、投資、倹約、相続、ヴェロニックにいい結婚をさせたいという野心）、その限りにおいて、土地取得の費用の出所については数十年のスパンできちんと説明されているといってよいだろう。

また工事費用については、ヴェロニックが夫から相続した財産、すなわちグラランが築いた財産がその元手となっている。グラランの成功については、倹約、幸運な情勢、毅然さ、絶え間ない労働、商売への熱中などによって簡単に説明されるばかりだが、重要なのは銀行家たるグラランが、おそらくは職業柄経済的合理性を尊重した上でモンテニャックの森の開発を計画していたという事実であろう。平原の灌漑事業についてはその限りではないけれど、このグラランのお墨付きは、モンテニャックの開発計画が全体として決して悪い投資先ではなかったと示唆する機能を作品中で持たされている。

最後に収益の改善ということに関して言えば、もともと「年一万五千フラン（744）」の収入しか得られなかった領地から、十二年後には「六、七千ルイ（759）」すなわち十二万から十四万フランの収入が見込めるようになるとボネ司祭が推測していることがまず注目される。そしてこの推測は、平原を五分割して作った農場のそれぞれについて、「地代が次第に上がっていって賃貸契約の十二年目には一箇所につき三万フランという額に達するはずだった（835）」という報告によって的中しつつあることが述べられている。こうしたことはすべて何の説得力もない数字合わせにすぎないのだが、それでもある種の現実感を与える役割は果たしているだろう。

こうした作品の細部をすべて好意的に受け取るならば、モンテニャックの開発事業はごく一般的な原資本蓄積の延長線上にあり、かつ投資と収益の関係から見ても十分現実的で、合理的なものとして描かれていることになる。だとすると、この事業を「国に対する奉仕（816）」なのだと自信をもって述

べるジェラールの言葉を文字通りに受け取っていいのかもしれない。

しかしながら、どんなにうまく辻褄を合わせても、結局はすべて作者バルザックの思いのままであることに違いはない。架空の事業の経済的合理性について読者を納得させることは、フィクションの原理からいってそもそも不可能なのである。そのことをよく分かっていたはずのバルザックは、説得の不可能性というこの一種のアリ地獄からなんとか抜け出そうとして、呪文のようなフレーズを繰り返し作品中に書きつけている。それは結局のところ気休めでしかないのであるが、それでも何もしないよりはましということになのだろう。すなわち、「安く済んだ」という趣旨の言葉が作中で繰り返されるのである。例をいくつか引用しよう。

> グラランから城館の修復を依頼された建築家は、この壮大な建物の主要な材料を煉瓦にした。煉瓦の製造に必要な土も木材もモンテニャックの森からとれたので、その分だけこの建物を安く上げることができた。(749-750)

> ガブーを堰き止めるのと、三つの小谷を通じて平原まで水を引くのに必要な工事や作業とで、六万フラン以上の費用はかからないに違いなかった。というのも、技師が村の共有地に石灰岩の山を発見したので、石灰が安く手に入り、森も近いので、石材や木材がただでしかも運搬の必要がないからだった。(826)

> このダム工事は八月の半ば頃に完了した。これと同時に、ジェラールは三つの主要な小谷に三本の水路を用意した。これらの建造物はどれも予算額には達しなかった。(833)

こうした部分だけを取り出してみると、つまらない小細工のような気がするが、すべてはモンテニャックの開発事業に文句のつけようのない成功を収めさせるための布石なのである。バルザックは「安く済んだ」と繰り返し記すことによって、架空の事業の経済的合理性を読者に認めさせようと、あるいは、自分自身に信じ込ませようとしているのではなかろうか。

労働力

土地開発事業を成功させるための最後の条件は、労働力の確保であろう。工作機械などまだない当時の状況を考えれば人力の重要さは想像以上のはずだし、そうした中で優秀な労働者を雇うにはそれ相応の努力が必要になる。ヴェロニックやジェラールはこの問題をどのように解決しているのだろうか。

ここで気をつけておきたいのが、決してこの問題を人件費の問題に還元す

ることはできないということである。なぜなら、彼らが目指しているのはモンテニャックの全体的発展なのであって、自分たちに富を集中させることではないからだ。

さらに、モンテニャック村の全体的発展ということを考えた際には、労働力の現地調達ということも重要になってくる。誰が工事をしようと最終的には村民に発展の恩恵が及ぶはずだという考え方もあるだろうが、やはり直接賃金を支払ったほうが村に落ちる金額も大きくなるし、地域の活性化というヴィジョンともしっくりくる。つまり、モンテニャックという小村に勤労意識の高い労働者が大勢いるような状態を作品中に無理なく作り出すこと、それがバルザックにとっての大きな課題になる。

作品中でこの問題の解決を任されているのは、間違いなくボネ司祭である。というよりもむしろ、われわれの考察がジェラールから出発しているためにこういう言い方になってしまうだけで、実際にはボネ司祭による住民の感化ということがすべての始まりなのである。司祭は、グラランによるモンテニャック購入の十五年以上前からこの仕事に取りかかっており、すでに大きな成功を収めていた。

> モンテニャックの小郡は風俗の悪いことで評判なところだった。リモージュの検事局は、県下の受刑者百人のうち、五十人はモンテニャックが所属する郡の住民だと口癖に語っていた。ボネ司祭が派遣されて二年後の一八一六年以来、モンテニャックもその不名誉な評判が消え、住民も重罪裁判所に一定の人数を送り込むということがなくなっていた。この村は、かつてはこの地方を荒らしまわった悪人どもの巣窟だったが、こうした変化が起こったのもボネ氏の感化によるものと、一般に考えられていた。(686)

つまり、モンテニャックはもともと犯罪者の多い土地だったのが、ボネ司祭の力によって風紀正しい土地に変わりつつあったということになる。これならば、労働者を現地採用するための環境が整っているといえるだろう。そしてもしも司祭が、「国家における大衆は、戦争における兵隊と同じように、受動的に服従する必要（823)」があるという自分の考え通りに（そして実はバルザックがカトリックの力に期待する通りに)、住民の教化に成功していたのだとすれば、効果は絶大である。その場合には、モンテニャックの住民は進んで事業の成功に協力してくれるにちがいない。

実際、ヴェロニックがモンテニャックに到着したとき、ボネ司祭は城館へと続く道を指差して、住民たちが「何も受け取ろうとはせずに（749)」作っ

たのだと言っている。ずいぶん気前のいい話だが、これについて語り手は、グラランが生前に城館の修復をしたときに彼らが受けた恩恵、すなわちグラランから受け取った賃金に対する「感謝の念（751）」から住民がこのような奉仕を行ったのだと説明することで、若干の真実味を与えようと努めている。しかし、こうした説明が説得力を持ちうるためには、その前提として、どうやってボネ司祭が住民の感化に成功したのかが明らかにされる必要があるだろう。賃金に対する感謝の念から奉仕活動に参加するというのは、決して誰にでもできることではないからである。

いったい、どのようにしてボネ司祭はモンテニャックの住民たちをこうまで変えることできたのか。『村の司祭』という作品の最大の問題がここにある。そしてそれは、バルザック自身が『村の司祭』の初版に付した序文中で発する問いでもある。

> いかなる手段によってボネ司祭は、性悪で、旧弊で、信仰がなく、悪事どころか犯罪にまで手を染める人々を、よりよい精神に活気づき、敬虔で、進歩を奉ずる善良な人々に変えたのであろうか。（638）

この問いに対するバルザックの回答は大きく分けて二つある。一つは、出版事情によって初版ではあきらめざるを得なかったが、いずれ「村での初聖体、司祭による教理問答、キリスト教学校修士会の授業など（639、原文はイタリック体）」を書き足すことによって、明らかにするというものである。ちなみにこれは実現されなかった。

もう一つの回答は、「小教区の精神を変えるためにボネ司祭が用いた手段を理解するためには、ファラベッシュの挿話だけで十分である（639）」というものだ。ファラベッシュの挿話というのは、殺人罪に問われていたこの男をボネ司祭が説得して自首させるのに成功した件のことであるが、それこそが司祭の強い感化力の証であるというのである。

となると、われわれとしては、ボネ司祭によるファラベッシュの改心という事件にどれだけの真実味が感じられるか、という新たな問いを立てる必要があるだろう。あるいはむしろ、そうした問いを立てても客観的な解答を得られないことは明白なので、バルザックがいかなる手段を用いてファラベッシュにおける信仰の回復という事件をもっともらしく見せようと意図したのか、と問うべきかもしれない。

この問いに答えるために検討すべき箇所は、ファラベッシュがヴェロニックに向けてその半生を告白する場面であろう。それを聞いてヴェロニックが、

「どうやって司祭さまがこの村を変えることがおできになったのか、あなたのおかげで分かりました…（790）」と言っているからである。

ところが、一見したところ、ファラベッシュの告白が伝えるボネ司祭の説得方法はさして特別なものではない。ボネ司祭は「お前を愛している（789）」、「お前を救いたい（789）」のだと言って、「来世（789）」の話をしたり、懲役を済ました後の「穏やかで幸せな生活（789）」を約束したりするのだが、決してそれ以上ではないのである。

そうだとするなら、なぜ、こうしたごく平凡に見える説得がファラベッシュを改心させ、告白の聞き手であるヴェロニックに感銘を与えるのだろうか。ファラベッシュの告白はごく短いもので、細部の積み重ねが全体としてある種の説得力を生み出すような仕上がりにはなっていない。そこには何か決定的で分かりやすい改心の原因が書き込まれていてしかるべきだろう。

そこで注目されるのが、告白の中で何度も言及される内縁の妻カトリーヌの存在である。ファラベッシュは次のように述べている。

> あの優しいお方は、カトリーヌは母親になるのだ、お前は二人の人間に恥辱を与えて放り出そうとしているのだ、と私に告げました。[…] カトリーヌは、マグダラのマリアのように泣いていました。いいですか、奥様、とファラベッシュは右手を見せていった。あいつはこの手に顔を押し当てて、私の手を涙でびっしょりぬらしました。お願いだから生きていてくれと私に頼んだのです。（789）

こうした説得と涙が決定的だったとファラベッシュが言っているわけではない。しかしながら、ボネ司祭によって引き起こされた魂の浄化を、「カトリーヌが与えてくれた幸福感」に喩えているのは注目に値するだろう。

> その時私は、私の魂の中に、子供の時以来味わったことのなかった、すがすがしさ、穏やかさ、優しさといったようなものを感じました。それは、あのかわいそうなカトリーヌが与えてくれた幸福感に似ておりました。（790）

そして、徒刑場での辛い日々については、こう振り返っている。

> あまり苦しみがひどい時には、十年先の、この森の中の家や、子供のバンジャマンや、カトリーヌのことを思い浮かべていました。（790）

ここまでくると、ヴェロニックがこの話を聞いてすぐに共感した理由は明らかであろう。彼女は、カトリーヌの願い通りに自首をして徒刑場へ赴いた

ファラベッシュの中に、自分をかばうために黙秘して処刑された愛人と同じ愛情の深さを見出して感動しているのである。すなわち、ヴェロニックがボネ司祭を優れた魂の導き手であると判断するわけは、夫婦愛や家族愛といった誰にもある強い感情を巧みに利用することを司祭が知っているからなのだ。

しかしながら、このヴェロニックの感動は、「小教区の精神を変えるためにボネ司祭が用いた手段を理解するためには、ファラベッシュの挿話だけで十分である」というバルザックの説明を、われわれが承認して受け入れるためには決して十分ではないだろう。なぜなら、すべての小教区民にファラベッシュが持つような夫婦愛や家族愛があると仮定するのは、決して現実的ではないからである。『人間喜劇』の多くの作品は、むしろそうした家族愛が失われ、悪しき個人主義によって家族が崩壊してゆく姿を描いてはいなかっただろうか。

結局、ボネ司祭によるモンテニャックの感化という奇跡は、住民たちがみな家族愛にあふれているという別の奇跡を前提としなければ起こりえないのであって、読者がこの奇跡を無条件に受け入れることを迫られている限りにおいて、作品の本当らしさはかなりの痛手を受けているということになるだろう。ヴェロニックとジェラールは何の努力もせずに実に勤勉な労働力を手にするのであるが、そのわけは、彼らがやってくる前からモンテニャックがある種のユートピアだったからなのである。バルザックは、こうした労働者たちにわざわざ名前を与えたりはしない。彼らは使用主の思いのままに動く機械のような存在にすぎないからである。そこではただ人数だけが問題となる。そうした例を一箇所だけ引用しておきたい。

> 五人の土工が、各道路の幅に合わせて十八フィートの広さを削って整地しながら、耕地の縁に良質の土をほうり出していた。その両側では、四人の男が溝掘りに専念し、同じく良質の土を耕地に土手状に積み上げていた。彼らの後ろでは、この土手が延びるにしたがって、二人の男がそこに穴を掘って、木を植えていた。各区画では、三十人の丈夫な貧窮者と、二十人の女と、四十人の娘や子供、合わせて九十人が石を拾い集めており、その石を人夫たちが、各グループによって集められた量を確認するために、土手沿いに並べて長さを測っていた。こうして、えり抜きの熱意あふれる労働者たちによって、すべての工事が同時に素早く進んでいった。(831)

*

以上の考察によってはっきりと分かるのは、モンテニャックにおける開発

の成功に本当らしさを与えるために、バルザックがあらゆる手段を尽くして努力しているということである。土地取得の経緯を当時の政治的状況から説明したり、開発に必要になる資金の出所を明確にしたりするのは、この事業に経済的合理性を与えるための工夫であると言えるだろう。

とはいえ、架空の村における開発事業の成功を証明することは原理的に言って不可能であることも、また厳然たる事実である。決して真の意味で読者を説得することはできないという意識、何を言っても結局はフィクションの騙りにすぎないという意識を持っていたに違いないバルザックは、モンテニャックの土壌を語りの進行につれて徐々に良いものに変えてしまったり、工事費について安く済んだという断定を多用したりする。こうした語りの戦略が、モンテニャックの開発の成功を本当らしく見せるのにどれだけ役立っているのか一概に判断することはできないが、少なくともバルザックが、レアリスムを犠牲にしてでも、モンテニャックの繁栄を描こうと意図していたことは明らかであろう。

ただし、そうした方針は結果として、ボネ司祭によるモンテニャックの住民の完全な感化という現実味のきわめて乏しい設定を、これといった弁明もなしに作品内に持ち込むことにもつながっている。バルザック自身が不足を認めている部分でもあるが、家族愛というまた別の理想の実現を前提としているファラベッシュの例を一般化することはできない以上、モンテニャックの住民がみな善良で勤勉であるという設定はやはり非現実的なものにとどまっており、彼らの勤勉な働きに支えられている開発事業の成功もまた、それだけ現実味の薄れたものになってしまっているように思われる。

『村の司祭』においてバルザックは、理工科学校卒の知的エリートがその能力を存分に発揮できるような場を創出することに心血を注いだ。それは、現実社会においてエリートたちが不遇をかこっていること、あるいは、そう思われることに対してのバルザックなりの異議申し立ててあった。その限りにおいて、『村の司祭』は一種のユートピア小説であるといえるだろう。

ただ、注意すべきは、バルザックが実現の可能性とは無関係に自らの理想を提示しようとしたわけではないということである。基本的にレアリスムの流儀にしたがって『人間喜劇』は書かれているのであり、重要なのは、現実からユートピアへの越境がすぐにも可能であるように見せかけることなのだ。したがって、「知性」の活躍を「信仰」の復活というさらに困難な理想の実現に従属させている点は、『村の司祭』の弱点であるというほかない。バルザックは『村の司祭』において、「知性」の完全な救済を成し遂げることはできな

かったのである。

結論

知的エリートを国家の上層に据えることで社会は安定し、その発展が可能になると考えるバルザックは、同時代のエリートシステムがその要請に応えていないと考え、このことに対して大きな不満を持つ。そこでエリートが国家の保護を離れて活躍する様子を描こうとするのだが、それができたのは『村の司祭』というユートピア的な作品の中においてだけであった。

もちろん、こうした理想主義的な作品を書くことでバルザックの現実認識までが変わったわけではない。たとえば、偉大な政治家になれるだけの頭脳をそなえた主人公が失意のうちに若死にする『Z・マルカス』(1840) には、「知能」の高さだけでは社会の中で指導的な立場を獲得できないという現実が、理想とは関係なく直視されている[31]。

むしろ興味深いのは、何があろうとバルザックが「知能」についての決定論的な考えを変えないことであろう。ある登場人物について、その「知能」の高さゆえに救うべきであると考えたり、「知能」が高いのに不遇をかこっていると憂えたりするためには、その人物の「知能」の高さが不変であり確実であると信じることができなければならない。バルザックによるエリートについての考察は、根本的には中流階級や下層階級[32]についての考察と同じ思考方法に基づいて行われている。つまり、人はエリートになるのではなくてエリートとして生まれるというのが、バルザックの一貫した考えなのである。

---

[31]「彼は祖国を崇拝していました。彼の考えのうちで、国のためではない考えなど一つとしてありませんでした。国を蝕む病毒の活発さを悲しみ、それに対する治療法を手にしながら、それを役立てることができない怒りが、彼を日夜さいなんでいました。」*Z. Marcas*, *CH*, t. VIII, p. 849-850.

[32] 拙稿を参照。「バルザック『従妹ベット』における「未開人」— 民衆の危険な力」、『仏語仏文学研究』第 28 号、東京大学仏語仏文学研究会、2003 年、p. 29-49。